

こどものためのプレパレーション

ほんとうに大切なこと

©へるす出版

特集にあたって

こどもにとって“かんじんなこと” 今、あらためて、プレパレーションの本質を探る

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。
かんじんなことは、目に見えないんだよ」¹⁾

『星の王子さま』のなかで、キツネが王子さまに伝えたこの言葉は、医療を受けるこどもと向き合う私たちにとっても、本質を突く一節であるように思います。

筆者が看護基礎教育を受けた30数年前、わが国ではまだ子どもの権利条約は批准されておらず、小児看護学の教科書に「プレパレーション」という言葉はありませんでした。1994年の条約批准を契機に、欧米からプレパレーションの概念が紹介され、当初は「心理的準備」と訳されながらも、しだいにその真の意味が理解されるようになってきました。それは単なる説明技法や業務ではなく、医療を受けるこどもの権利を守るためのケアのあり方そのものを問う概念でした。ただ、このプレパレーションの概念の本質は、30数年前の基礎教育のなかでも小児看護の本質として“たしかなもの”として教えられており、その概念がもち込まれるずっと前から、こどものケアに携わる看護師が大切にしてきたことだと思います。

やがて、教育や臨床の場にプレパレーションが取り入れられ、専門職の活動も広がり、現在では「プレパレーションをする」という言葉が日常的に使われるようになりました。しかしその一方で、特別なツールを用いてこどもに説明すること、あるいは説明によってこどもが泣かずに医療に「協力」できるようにすることが目的であるかのように受け取られてしまう場面も少なからず見受けられ、表層的な理解が広がってきってしまったようにも感じられます。説明したら終わり、理解できない乳児には不要、特別な人が特別な場面で行うもの…。

そうした誤解が広がりつつある今、私たちはあらためて立ち止まり、プレパレーションの意味を問い直してみたいと考えました。

プレパレーションの本質は、「こどもに」説明することではなく、「こどもと」ともにあることにあります。こどもの“こえ”に耳を傾け、こどもが主体となり、自分なりに理解し、納得し、状況に向き合えるよう支えること。その過程で大切にされるのは、こどものコントロール感や安心感であり、医療の場にいる人々を信頼できるという感覚です。これらは、数値や手順としては見えにくいものですが、こどもにとっては何よりも「かんじんなこと」です。

本特集は、こどもの権利というものを、広い視野で、さまざまな立場の方からの執筆を通して考える機会としたいと考えました。こどもの年齢や発達段階、専門職の職種や立場、そして日常的なさまざまな医療場面における実践や思索を通して、読者の皆さんが、それぞれのお立場で「目に見えない大切なこと」に立ち返るきっかけとなれば幸いです。こどもが医療の場を、そして社会を安全な場所として感じられるように…そのための“ほんとうの”プレパレーションが特別なものではなく、日常的な実践として根づいていくことを願っています。

【文献】

- 1) サン＝テグジュペリ(内藤濯・訳)：星の王子さま。岩波書店、東京、2000、p 103.

平田美佳 Hirata Mika

順天堂大学大学院医療看護学研究所、
同大学医療看護学部教授／小児看護専門看護師